

第 76 号

2010.7

伊藤外科ニュース

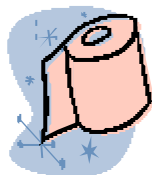
<http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp/index.html>がんばりました、日本代表！！

4年に一度のサッカー・ワールドカップの賑わいも一段落。皆様もご承知の通り、サッカーの日本代表チームは見事予選を突破して、ベスト16まで進出しました。サッカーを愛する者のひとりとしてとてもうれしく、また代表チームを誇りに思いました。しかしながら、先月号でも書いたように、日本のサッカーはまだ歴史が浅く、世界の強豪と比較すると、多くの点で劣っています。強い代表チームができるまでに若いプレイヤーが世界の一流国で、今後活躍することと、「リーグが面白くなることを期待しています。

下痢について

夏にも多い「下痢症」について、少しお話しします。

通常、人間の便の70～80%は水分です。その水分の源は、一日に摂取する水分と、消化液7リットル（唾液1.5リットル、胃液2.5リットル、胆汁膵液2リットル、腸液1リットル）です。健康なときは、以上の水分の99%は腸で再吸収されます。この腸の吸収力が感染症などのさまざまな原因で衰えると、下痢をするわけです。血便、発熱がなく、激しい痛みを伴わない下痢症は、多くが一時的なものなので、あまり不安を感じる必要はないと思います。水分をゆっくり摂りながら、それでも改善しない場合は、医者にご相談ください。

梅雨時の体調管理に気をつけましょう

私が医師になった昭和後半の時代には、病気の発症時期にも季節による特徴がありました。例えば、このうっとうしい梅雨の時期には食品が腐りやすいように、お腹の病気も虫垂炎に代表されるような炎症性のものが多かったものです。医者になって初めて赴任した地方の病院では、梅雨から夏にかけて、毎日のように数名の虫垂炎患者さんが手術を受けていました。

ある日、小学校5年生の男の子の手術が終わった後、その子のお母さんが「先生、ついでに3年生の弟も手術してください」と言ってきました。弟さんは健康でしたので、丁寧にお断りしましたが、それほど虫垂炎は多い病気だったのです。

しかし、衛生状態がよくなったためでしょうか、最近は年に数回しかお目にかかりません。かわって近頃は、夏場のインフルエンザや、昔は子どもの病気だった「はしか」などのウィルス感染症が大人にも注目されています。インフルエンザは、木枯らしが吹く寒くて乾燥した冬の病気でしたので、4年前の7月、20代の男性が発症して来院したときは、なかなか診断が付きませんでした。

いずれにしても、高温多湿なこの時期は、体力も低下し、感染症にかかりやすいので、睡眠を十分にとり健康管理には注意したいものです。

いよいよ盛夏となります。

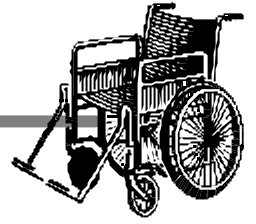
皆様、ご自愛くださいませ。

（院長）



今回の一冊

三弓先生の本棚



らくようせきご
『落葉隻語 ことばのかたみ』 多田 富雄

三弓の本棚に『寡黙なる巨人』という本がある。免疫学の世界的権威にして、古典芸能の「能」の分野でも新作能の作家として知られている多田富雄氏の本だ。実はこの本、私が三弓に貸したもの。多田氏は三弓と同じく千葉大学出身。2001年に脳梗塞で生死を彷徨い、右半身麻痺や嚥下・発声障害のリハビリに立ち向かいながら、研究、能の創作や執筆も続けている。『寡黙なる巨人』は発病から障害の認識、リハビリへと向かう壮絶なる日々を記録した本だが、三弓に指しだすと「おおっ、これを買ってきてもらおうと思っていたんだ」と早速ページを開き、いつの間にやら、自分の蔵書のひとつとして本棚に納めてしまった。

『落葉隻語 ことばのかたみ』（青土社刊）は、今年5月に出た多田氏の最新刊である。もちろん、三弓は読んでいない。これでは本コーナーのルール違反だが、「肉体がないというのは不自由だねえ、新刊も読めなくて。私が読ませてもらいましょうねえ」とここで紹介することにした。

多田氏は脳梗塞による後遺症でしゃべることができない。といっても、障害があるのは「発声」。脳は従来通り深く思考する（これについては『寡黙なる巨人』に詳しく）。70歳を越え、重度の身体障害を抱え、さらには2007年に前立腺の癌を患う。残された時間を思いながらも、読売新聞に連載し続けたコラム「落葉隻語」、そしてここ2年程の間、各媒体に掲載した記事や講演をまとめた「ことばのかたみ」が納められている。

本書で多田氏が何度も訴えているのは、日本社会の崩壊である。「健全な中流が社会の中心となっていた時代ははるか、現在は過剰な競争と能率主義・成果主義・市場原理主義で格差が広がり、健全な社会ではなくなった」と語り、「後期高齢者医療制度やリハビリの日数制限などは、市場原理主義にもとずく過酷な『棄民法』だ」と語気は強い。2006年、小泉政権のとき、「リハビリは発症後180日と制限する」という法案が成立した。リハビリに日数制限が設けられるというのは、患者にとっては回復の見込みを抹殺されることに等しいという。多田氏はこの法案の白紙撤回の呼びかけとして新聞に投稿し、それがきっかけとなり撤回に同意する48万人もの署名を集める運動となり、自ら車椅子で厚生労働省に署名を持参した（結局、この運動はまったく無視されることになるのだが）。

病んでいくこの国が立ち直るためには、「日本人の心に立ち返ること」だと氏はいう。詳細は本書を読んでいただきたいが、多田氏のいう「日本人の心」の一例を挙げると、「ものもののあわれ」という文化や美学を回復することとある。「もののあわれ」——この言葉ひとつを深く理解し、己のなかに回復するだけでも、（自分も含め）いまの日本人にはなんと困難なことか。

本書のあとがきは、こう締めくくられている。

「まだまだつらい痛い日が続くだろうが、この本が無事出版されることを夢見ている。書き散らしにも真実はあると思う。2010年2月 多田富雄」

すでにご存知の方も多いと思うが、多田富雄氏は本書の発売を待たずして、4月21日、不帰の客となられた。

環境問題・社会問題の話になると、「どうせその頃は、私は生きていないから」という言葉を耳にすることがある。自分が生きている80年ほどの時間だけでなく、そこまで脈々と続いてきた時代、その先に続くだろう未来（未だ来ていない時間の帯）、それらに想いをはせる市井の人たちが確実に増えることでしか、いまの日本社会は軌道修正できないのだろうなあ——多田先生の本を読み終え、そんなことを思いながら、選挙報道を観ていた。（一弓）